

## 「～ておきます」之指導案 —以『大家的日本語』為例—

城戸秀則

東吳大學日本語文學系／博士生

### 摘 要

「～ておきます」是初級的文法項目，例如在『大家的日本語』裡，初級後半第三十課提出了「準備」、「措置」、「放置」的用法。但對學習者而言，很難分辨有「～ておきます」與沒有的差異，或是很難分辨「準備」和「措置」的差別在哪裡等等，有許多學習者感到困惑的項目。本稿以對學習者而言容易理解的記述和教學方法為目標，提出「～ておきます」的基本用法為「措置」，使用在「為了避免發生問題而做的準備」的場面、文脈之指導案。

關鍵詞：「～ておきます」、『大家的日本語』、基本用法、「措置」、指導案

# **A Proposal for Teaching Method of -te okimasu: Taking “Minna no Nihongo” for Example**

Kido, Hidenori

Ph.D.student, Department of Japanese Language and Culture, Soochow  
University

## **Abstract**

This paper proposes a method for teaching -te okimasu. This is regarded as a grammatical item that the beginner-level learners learn. For example, “Minna no Nihongo”, a textbook for elementary level, presents -te okimasu as the expression which has three usages : a necessary action or behavior to be performed by a certain time, preparation for something in the future (called “preparation”), some temporary measures or completing a necessary action in preparation for the next time one use something (called “measures”), keeping a resultant state as it is (called “keeping”). However, -te okimasu has a lot of problems for learners, for example, the difference of presence or absence of -te okimasu is not clear, it is hard to distinguish which usage is , etc.

Therefore, in this paper, aiming for the description and the teaching method that are easy to understand for learners, we propose a method for teaching : -te okimasu is to be considered as “measures”, and used in the situation that “ to take measures so that problem will not happen”.

Keywords: -te okimasu, “Minna no Nihongo”, basic usage, “measures”,  
a teaching method

# 「～ておきます」の指導法の一試案 —『みんなの日本語』を例に—

城戸秀則

東呉大学日本語文学科／博士課程

## 要 旨

「～ておきます」は、初級で提出される文法項目である。例えば、『みんなの日本語』では、第 30 課で「準備」「措置」「放置」の用法があるとして指導される。しかし、学習者にとっては、「～ておきます」の有無による違いがわかりにくい、「準備」「措置」の違いがわかりにくい、など問題を抱えた項目でもある。

そこで、本稿では、学習者にわかりやすい記述、教え方を目指して、「～ておきます」の基本的用法を「措置」と捉え、「問題が起きないように備える」という場面・文脈で使用されるものとして指導することを提案する。

キーワード：「～ておきます」、『みんなの日本語』、基本的用法、  
「措置」、指導法の提案

## 1. はじめに

「～ておきます」は、日本語教育においては初級の文法項目となっており、主に「準備」を表す表現として提出される。一方で、以下のような誤用・非用も散見される<sup>1</sup>。

### (1) (アルバイトを紹介されて)

A: わあ、よさそうですね。すぐ履歴書を準備しておいて、応募します。

### (2) (運動会の目的について話す場面で)

運動会の目的について三つの理由を考えておきました。一つ目はシンプルに運動能力の向上のため、…

### (3) (学習者の作文からの例)

事故や災難はいつに起こるか、予想できないである。常に食べ物を準備するのは重要だ。

(1) (2) は「～ておきます」を使用すべきではないところで使用した誤用、(3) は逆に、「～ておきます」を使用すべきところで使用していないもの、つまり非用である。

では、なぜこのような誤用・非用が見られるのであろうか。

## 2. 教科書における扱い

本節では、冒頭で見た誤用・非用の原因を探るために、『みんなの日本語』(以下、『みんな』)をもとに、白川(2002)が提案する「教材分析」を試みる。

### 2.1 白川(2002)の「教材分析」

白川(2002)は、教材や教え方が誤用や非用を生む要因になっているのではないかという観点から、教材や教え方を批判的に検討す

---

<sup>1</sup> (1) ～ (3) は筆者が担当した学習者のものである。市川(2010)でも誤用・非用の例が多く取り上げられている。

ることを「教材分析」と呼び<sup>2</sup>、これにより、学習者にとって必要な記述の「勘どころ」を押さえることができるとする<sup>3</sup>。

もし冒頭の誤用・非用の原因が教材や教え方にあるのであれば、「教材分析」により、その原因を明らかにできる。さらに、その原因をもとに、「勘どころ」を押さえた記述が可能になると考える。

## 2.2 『みんなの日本語』における扱い

ここでは、『みんな』を例に見ていく。理由は、『みんな』は台湾で最もよく使用されている教科書だからである<sup>4</sup>。

『みんな』では、「～ておきます」は第 30 課で提出され、次の三つの用法が指導項目となっている。(4) (5) (6) は、それぞれ「準備」「措置」「放置」とされるものである。

(4) 来月の出張ですが、ホテルを予約しておきましょうか。

……ええ、お願いします。

(5) はさみを使ったら、元の所に戻しておいてください。

……はい、わかりました。

(6) あの箱、捨てましょうか。

……あとで使いますから、置いておいてください。

((4) (5) は例文、(6) は練習 B6 3)

「～ておきます」は、「ある目的のためにあらかじめある行為を行う」(庵・高梨・中西・山田 2000)、「あとに起こる事柄を予想して、

<sup>2</sup> 「学習者の文法知識は、良くも悪くも、どのように教えられたかということに左右される部分が多い。教材(教科書や問題集、文法、解説書)の誤った(ないしは誤解を生む)教え方、あるいは不完全な教え方が誤用や非用を生む要因になる(あるいは現になっている)のではないかという観点から教材を批判的に調べてみるという形の「教材分析」を考える。」(白川 2002: 76)

<sup>3</sup> 「「勘どころ」を押さえるとは、「なるほど、この形式はこういうときに使うのか」と合点できるような、使用に結びつく生きた文法知識を提供すること(非用を生まない記述)であり、また、放っておけば生じかねない「勘違い」を予測して「言えそうだが言えない」表現を未然に回避すること(誤用を生まない記述)である。」(白川 2002: 73)

<sup>4</sup> 「現在台湾では圧倒的に人気があって、最もよく使用されている教科書は『大家的日本語』である。」(林 2011: 注釈 13)

前もって何かをする」(市川 2005)と説明されており、「あらかじめ」  
「前もって」行われる「準備」的な行為を第一の用法として、「措置」  
や「放置」の用法が指導される。

しかし、一方で、「テオクは多くの場合、有標形と無標形の文の違いが必ずしも明確に感じとれない。また、「非用」が問題視されにくいこともあり、文法研究の面でも日本語教育の面でも扱いの難しい文法形式である。(中略)学習者の観点に立つならば、当該の形式がどのような意味・用法を有するかの知識だけを与えられても、それを適切な運用に結びつけるのは難しい。」(佐藤 2015: 16) ことが指摘されている。

さらに、野田 (2005) では、「教えても習得されない文法項目」とされ、初級では「理解できるだけでよいことにしたり、中級より後の段階に回すなどして、学習者の負担を軽減させたほうがよい」とされる。

このように、「～ておきます」は、日本語教育において「扱いの難しい」「教えても習得されない」とされているが、では、なぜこのような問題が生じるのであろうか。

## 2.3 『みんな』における問題点

### 2.3.1 「～ておきます」の有無による違いがわかりにくい

まず、「～ておきます」を「準備」「措置」と捉えたと、「～ておきます」を用いた文とそうでない文との違いがわかりにくくなること  
が、佐藤 (2015) で指摘されている<sup>5</sup>。次の (7) (8) は「準備」「措

<sup>5</sup> 佐藤 (2015) は以下の例をあげ、

(i) 次の授業までに必ず予習 {する / しておく} ように。

(ii) あとで、電気、消 {して / しておいて} ください。

(佐藤 2015、一部改)

(i) の場合、「予習する」にしても「予習しておく」にしても、授業のための準備であることには変わりなく、予習するという行為はその結果や影響を意図した行為である点でも変わらないと述べている。また、(ii) の「処置」と位置づけられてきたものも、「消す」にしても「消しておく」にしても、やるべきこともその目的もまったく同じであるため、有標形と無標形の違いがわかりづらいとしている。このことは、(4) (5) にもあてはまる。

置」の例であるが、確かに「～ておきます」の有無による違いがわかりにくい。

(7) A: 来週のミーティングまでに何を {a. しておい / b. シ} たらいいですか。

B: そうですね。この資料をコピー {a. しておい / b. シ} てください。

A: はい、わかりました。

(8) A: 手伝いましょうか。

B: ええ、お願いします。

A: お皿やコップはどうしましょうか。

B: 台所へ持って {a. 行っておい / b. 行ッ} てください。

A: はい、わかりました。

(第 30 課練習 C3)

(7) には来週行われるミーティングに備えているイラストが、(8) には食事の後片付けをしているイラストが、それぞれ場面がわかるように添えられてあることから、学習者にも、それぞれがミーティングの準備をする場面、食事後の片付けをする措置の場面であることはわかる。しかし、「～ておきます」を使わない (7b) (8b) であっても、「準備」「措置」であることに変わりない。このことからわかるのは、「準備」「措置」の用法を指導するために、「準備」「措置」であることがわかる場面を提示しても、学習者は「準備」「措置」の場面で「～ておきます」が使われることは理解できても、なぜそこで「～ておきます」を使用する必要があるのかがわからない、ということである。

### 2.3.2 「準備」と「措置」の違いがわかりにくい

次に、「準備」「措置」と分けて、それぞれを「～ておきます」の用法として指導することにも問題がある。佐藤 (2015) は、「準備」であるか「処置」であるかは、発話場面の違いにおける相対的なも

のであるとし<sup>6</sup>、吉田（2012）は、「～ておきます」の意味が「準備」であるか「暫定的処理」（「措置」）であるかという区別は、文脈レベルで発生するものでありそれほど意味のあるものではないとする。

（9a）は『みんな』では「準備」とされている例である。

（9） a. 友達が来るまえに、部屋を片づけておきます。

（第 30 課練習 B3）

b. （もうすぐ友達が家に来るが、散らかっている部屋を見られたくない、という場面）

友達が来るまえに、部屋を片づけておきます。

c. 母が帰って来るまえに、部屋を片づけておきます。

（9a）は、確かに、友達を迎えるための準備として部屋を片づけると考えれば「準備」ともとれなくはない。しかし、同一の文でも（9b）のように場面が与えられれば、「片づける」ことは友達が来るまえに必要な措置と解釈される。また、（9c）のように「友達が来る」ではなく「母が帰って来るまえに」とすると、場面に関係なく「措置」と解釈される。

次の（10a）も同様である。

（10） a. 試験のまえに、復習しておきます。

（第 30 課練習 B3）

b. （前回の試験は復習せずに受けて合格できなかったため、今回は必ず復習して受けることを先生に約束する場面）  
試験のまえに、復習しておきます。

---

<sup>6</sup> 佐藤（2015）は、以下の例をあげ、

（iii）夕食の支度のために買い物をしておいた。

（iv）返答に困ったので、とりあえずそう言うておいた。

（佐藤 2015）

（iii）「準備」であるか（iv）「措置」であるかの違いは、「動作主の意図が発話場面から切り離された時空間における効力の発揮にある場合は「準備」の用法として解釈され、行為遂行直後の発話場面における効力の発揮にある場合は「処置」と呼ばれる用法として解釈されるという、相対的な違いしかない」とする。



(10a) は、試験に備えて復習すると考えれば、「準備」ともとれなくはない。しかし、同一の文でも (10b) のような場面が与えられれば、復習することは試験に合格するために必要な措置と解釈される。

『みんな』では、「準備」の練習として、「～まえに、～ておきます」という、「準備」であることを前提とした形式で、「～ておきます」が提示されている<sup>7</sup>。しかし、(9b) (10b) のように場面が与えられれば、「措置」と解釈される。これは、「準備」「措置」という分類には検討の余地があることを示しているのではないか。

さらに、上掲の「放置」とされる (6) においても同様のことが言える。箱を捨てずに置いたままにすることは、「あとで使う」ために必要な「措置」とも解釈できるためである。

「～ておきます」には「準備」「措置」「放置」の用法があると指導されてきたが、このように、形式にラベルを貼るだけの指導では、学習者はその字面から意味は理解できるであろう。しかし、それが実際に学習者の使用に結びつく分類になっているのかというと、必ずしもそうとは言い切れないのではないか。

以上、この節では、「教材分析」の観点から、『みんな』における「～ておきます」の記述や教え方を批判的に検討し、「準備」「措置」であることがわかる場面で「～ておきます」を提示しても、「～ておきます」の有無による違いがわかりにくいこと、また、そもそも「準備」「措置」「放置」として分類すること自体がわかりにくいことを指摘した。このれらのことから、現行の記述や教え方が、学習者の「～ておきます」に対する正確な理解を困難なものとし、その結果、適切に産出できず、冒頭のような誤用・非用を生む要因になっていると考えられる。

---

<sup>7</sup> これは、「措置」の用法の練習にも言える。練習 B4 では「使ったら、～ておきます」となっているように、「措置」であることを前提とした形式が提示されている。

### 3. 先行研究とその問題点

#### 3.1 先行研究の流れ

高橋（1976）は、「～ておきます」を「あとのことをかんがえにいられてするうごきをあらわす動詞」と規定し、この形式には「すがた動詞」と「もくろみ動詞」の用法があるとする<sup>8</sup>。つまり、「～ておきます」には、「うごき」を表す場合と「もくろみ」を表す場合の二つのタイプを認めているのである。

吉川（1976）は、「～ておく」の基本的意味を「対象を変化させて、その状態を持続させること」であり、「準備」「一時的処置」といった意味はこのアスペクトの意味にある種のムード性が加わったものであるとする。そして、「～ておく」の用法を七つに分け、「対象（の位置）を変化させ、その結果の状態を持続させる」「放任」「準備」「一時的処置」といった用法を挙げている。「～ておく」をアスペクトと見なし、その観点から用法を整理している。

笠松（1993）は、「～ておきます」を「《もくろみ動詞》であり、予想される出来事にそなえて、なんらかの《結果的な状態》をのこす、意図的な動作を表している」（笠松 1993：123）とする。アスペクトの意味が基本にあるという吉川（1976）とは逆に、「もくろみ性はアスペクトをふくみこんでいる」としている。

一方、谷口（2000）は、「～ておきます」の用法には「準備性」とは対照的な、「終結性」を持つ場合も見られるとし、「～ておきます」の本来的機能を「処置的動作」ととらえることで、それが文脈によって事前処置（準備性）としての機能を有したり、事後処置（終結性）の機能を有したりすることが説明できるようになるとしている。

「～ておきます」を「準備性」ではなく「終結性」を持つという観点からとらえたものである。

---

<sup>8</sup> 高橋（1976）によれば、「すがた（aspect）」とは「動詞のあらわすうごきの過程のどの部分を問題にするかという、文法的な意味」であり、「もくろみ」とは「動詞のあらわす動作がなんのためにおこなわれるかをあらわす文法的な意味」であるという。

山本（2005）は、「～ておきます」の基本的意味を「ある具体的な目的（P）に向けて、そのための行為（Q）を予め行うこと」を表す「準備」であるとし、「終結性」も含めて、「～ておきます」の先行研究で挙げられた用法を「準備」の観点から整理している。これは、「～ておきます」の基本的意味を「準備」としてとらえた研究である。

上記の先行研究では、「～ておきます」の意味の基本を、アスペクト性に求めるのかもくろみ性に求めるのか、或いは、「準備」に求めるのか「終結」に求めるのか、ということを中心に議論が進められている。

さらに、菊地（2009）は、「～ておきます」の中心的な意味特徴を「後の時点における効力の発現を見越して意図的にその行為を行うこと」とし、「準備」を表す用法から「終結性」を持つ用法までを統一的に説明することを試みている。

また、佐藤（2015）は「～ておきます」のスキーマ的意味を「動作主が動詞の示す行為の結果や影響を意図してその行為を遂行したことを有標的に示す」とし<sup>9</sup>、それが文脈により、「準備」の用法として解釈されたり、「処置」の用法として解釈されたりするとする。

菊地（2009）、佐藤（2015）に共通するのは、アスペクト性やもくろみ性、「準備」や「終結」の観点から「～ておきます」の意味をとらえるのではなく、各用法に共通する抽象的な意味特徴を規定した上で、そこから、それぞれの用法を説明しようとしている点である。

このように、「～ておきます」の研究は、その基本的意味が、アスペクト性にあるのかもくろみ性にあるのか、或いは、「準備」にあるのか「終結」にあるのか、という議論の過程の中で、それが次第に「～ておきます」の用法に共通する意味を抽出するという流れになっているようである。

---

<sup>9</sup> 「スキーマ的意味とは、どの用法であれ当該の形式のすべての用法が共通して有する意味特徴である。」（佐藤 2015：7）

しかし、このような「～ておきます」を意味・用法から捉えようとする研究に対して、日本語教育の観点から疑問を呈したのが、佐藤（2015）である。

### 3.2 佐藤（2015）による先行研究の問題点の指摘

佐藤（2015）は、「～ておきます」のスキーマ的意味を上述のように規定しながらも、「テオク」の機能を「準備」や「目的」等の観点でとらえたとしても、「意図的遂行の有標的提示」としても、上の（16）や（17）における有標形と無標形の使い分けを説明することは難しい」（佐藤 2015：9）とし<sup>10</sup>、文レベルにとどまる文法研究の限界を指摘する。

佐藤（2015）は、学習者に必要なのは、文レベルを超えた、文脈、場面などの語用論レベルの観点からの説明であると説く。その上で、母語話者による有標形選択の動機を明らかにすることで、学習者が「～ておきます」を学ぶ上での問題を解決しようとしている。

### 3.3 母語話者による有標形選択の要因

佐藤（2015）は、有標形と無標形の違いがわずかなものであるにせよ、母語話者がそれを使い分ける動機があるはずであると述べ、母語話者の有標形を選択する要因あげている<sup>11</sup>。

（11）①段取り意識と行為遂行のタイミング考慮

②結果の予想・確認による行為遂行の振り返り

③丁寧さ等の含意

（佐藤 2015）

まず、「①段取り意識と行為遂行のタイミング」である<sup>12</sup>。

<sup>10</sup> ここでの（16）（17）は、次の（v）（vi）を指す。

（v）次の授業までに必ず {予習する / 予習しておく} ように。

（vi）お問い合わせの件は、上司に {伝えます / 使えておきます}。

（佐藤 2015）

<sup>11</sup> この三つ以外に、「④行為の存在自体の叙述」もあげられているが、これは「有標形非選択の要因」であるため、取り上げなかった。

<sup>12</sup> 〈 〉内の数字は有標形選択率を示す。

(12) a. 今日がテストなので、昨日は {勉強した / 勉強しておいた}  
〈0%〉

b. 今日から忙しいので、昨日のうちに試験の {勉強をした / 勉強しておいた}。〈76.2%〉

(佐藤 2015:11)

佐藤 (2015) によれば、(12a) に比べて (12b) の方が有標形選択率が高いのは、「ある時点から試験までの段取りをよく計算し、試験勉強を当該のタイミング (つまり「昨日のうち」) で遂行すべき点が考慮されている」ためであるという。

次に、「②結果の予想・確認による行為遂行の振り返り」について、次の例をあげている。

(13) a. 私はここに自転車を {とめた / とめておいた}。〈28.6%〉

b. ここに自転車を {とめる / とめておく} と盗まれますよ。  
〈66.7%〉

c. お菓子をテーブルの上に {置いた / 置いておいた} ら、弟が食べてしまった。〈95.2%〉

(佐藤 2015:13)

「～ておきます」が従属節に置かれた場合、「主節において行為の結果が予想されていたり確認されていて、その時点から行為遂行時が振り返られる場合、従属節述語のテオク有標形選択率は相対的に高くなるようである。」(佐藤 2015 : 12)

最後に、「③丁寧さ等の含意」である。

(14) (書店のカウンターで)

客 : この本を注文したいのですが。

店員 : このカードにお名前と電話番号を記入してください。

あとはこちらで {やります / やっておきます}。

〈38.1%〉

(佐藤 2015 : 13)

(14) において「～ておきます」の有無が母語話者に与える印象の違いを調べ、有標形の方がより丁寧な印象を与えると指摘し、その理由を、「「やっておく」という有標形は、単に店員が当該の作業を行うことを表明するだけでなく、その作業にあたってその後の結果についても慎重に考慮していることを含意するからである」としている。

佐藤（2015）は、母語話者の有標形選択の要因を明らかにすることで、「～ておきます」の有無による違いを見出し、学習者による適切な運用につなげようとしている。

### 3.4 「～ておきます」の指導に必要なこと

先行研究においては、「～ておきます」の意味や用法が議論され、その後、研究が進むにつれ、「～ておきます」に共通する意味を抽出し、そこから用法が説明されるようになった（3.1）。しかし、佐藤（2015）によって、このような文レベルの研究には限界があることが指摘され（3.2）、文レベルを超えた、文脈、場面などの語用論レベルの観点からの説明の必要性が説かれる（3.3）。

では、学習者が「～ておきます」を使えるようにするためには、指導においてどのようなことが必要になってくるのだろうか。

白川（2002）は、学習者が知りたいのは、文脈を捨象した抽象的な意味ではなく、むしろ、具体的にどのような場面で使われるのかということであるという指摘を行っているが、これは、まさに、文脈、場面などの語用論レベルの観点からの説明の必要性を説く佐藤（2015）の主張と軌を一にする。

現行の指導においては、「準備」「措置」「放置」の用法があると指導されているが、「準備」「措置」「放置」というラベルを貼り、それぞれの場面で使われると指導するにとどまり、なぜそこで「～ておきます」が選択されるのか、ということにまでは触れられていない。そのため、「～ておきます」の有無による違いがわかりにくい、また、そもそも「準備」「措置」「放置」の違い自体がわかりにくい、とい

った問題が生じるのである。しかし、逆に言えば、「～ておきます」の有無による違いがわかるような、「準備」「措置」「放置」という分類をしなくてもすむような記述を考えればよいのではないか。それには、具体的な場面や文脈を通して、「～ておきます」の用法を捉えることが必要になってくる。

#### 4. 「～ておきます」の使用場面・文脈の考察

この節では、「～ておきます」の使用場面・文脈を考察し（4.1）、それをもとに、「～ておきます」の基本的用法が「措置」であり（4.2）、「放置」もまた「措置」の観点から説明できることを述べる（4.3）。最後に、佐藤（2015）の母語話者による有標形選択の要因に対する説明を試みる（4.4）。

##### 4.1 「～ておきます」の使用場面・文脈

3.4 で述べたように、学習者にとって必要なのは、この形式が具体的にどのような場面、文脈で使われるのかということである。

次の（15）は、ミラーさんが鈴木さんの家を訪れた際に、鈴木さんが非常袋について話している場面である。

（15）ミラー：こんにちは。

鈴木：いらっしゃい。さあ、どうぞ。

ミラー：大きいリュックが置いてありますね。

山へ行くんですか。

鈴木：いいえ。非常袋ですよ。

ミラー：非常袋？何ですか。

鈴木：非常時に使う物を入れておく袋です。

電気やガスが止まっても、3 日ぐらい生活できるものが入れてあるんです。

ミラー：水や食べ物ですか。

鈴木：ええ、ほかにもいろいろありますよ。

懐中電灯とか、ラジオとか……。

ミラー：わたしも準備しておかないと。

鈴木：非常袋はスーパーでも売っていますよ。

ミラー：そうですか。じゃ、買っておきます。

(第 30 課会話)

(15) は、「非常袋」について話している場面である。非常袋があれば「非常時に」「電気やガスが止まっても 3 日ぐらい生活できる」とあることから、「非常袋に使う物を入れておく」「非常袋を準備しておく」「非常袋を買っておく」ことが、非常時に電気やガスが止まって、生活できなくなるという問題が起きないようにするための措置であることがわかる。つまり、ここでの「～ておきます」はいずれも「措置」である。ここで重要なのは、「非常袋」について話している場面であり、非常袋を用意することが、問題が起きないようにするための措置であることが文脈から理解できるということである。

このことから「～ておきます」が「措置」として解釈されるためには、「問題が起きないように備える」といった場面・文脈が必要であるということがわかる。(15) では、「非常時に」「電気やガスが止まる」とあるように、非常時に起こり得る問題が文脈として現れ、その問題に備えるために「～ておきます」が使用されている。したがって、学習者には、「問題が起きないように備える」といった場面・文脈を示し、その問題が起きないようにするための措置として、「～ておきます」が選択されると説明すれば、「～ておきます」が使用される動機が理解されやすいのではないだろうか。

このように、学習者が「～ておきます」の使用動機を理解するためには、措置であることを前提とした場面・文脈を提示して「措置」として指導したり「～ておきます」が現れた一文のみを見て「措置」かどうかを判断したりするのではなく、「問題が起きないように備える」という具体的な場面・文脈を明示し、その問題が起きないようにするための措置として「～ておきます」が使用されることを指導することが必要になってくる。これにより、「～ておきます」の有無による違いがわからない、ということもなくなるのではないか。



## 4.2 「～ておきます」の基本的用法

4.1 では、「問題が起きないように備える」といった具体的な場面・文脈を明示し、そのための措置として「～ておきます」を指導する必要があることを述べたが、ここでは、「～ておきます」の基本的用法が「措置」と捉えられることを述べる。

まず、(9b) であるが、(16) の波線部が「問題」となっており、この「散らかっている部屋を見られる」という問題が起きないようにするための措置として、「～ておきます」が使用されていると考えられる。

(16) (もうすぐ友達が家に来るが、散らかっている部屋を見られたくない、という場面)  
友達が来るまえに、部屋を片づけておきます。

つまり、友達が来たときに、散らかっている部屋を見られないための措置として、「部屋を片づけておきます」となる。

次に、(10b) であるが、(17) の波線部が「問題」となっており、この「合格できない」という問題が起きないようにするための措置として、「～ておきます」が使用されていると考えられる。

(17) (前回の試験は復習せずに受けて合格できなかったため、今回は復習して受けることを先生に約束する場面)  
試験のまえに、復習しておきます。

つまり、試験のときに、合格できないという問題が起きないように (つまり、合格できるように)、「復習しておきます」となる。

(9b) (10b) が「措置」として解釈されるのは、(16) (17) における波線部「散らかっている部屋を見られる」「復習しないと合格できない」という「問題」が場面の中に存在するためである。「部屋を片づける」「復習する」ことが、問題が起きないようにするための措置と解釈されるわけである。一方、「準備」とされる (9a) (10a) には、そのような場面が与えられていない。(9b) (10b) と (9a) (10a)

の違いは、「問題」の部分が場面の中に与えられているかどうかである。このことから考えられるのは、(9a) (10a) は、実は、「問題」となる部分が現れていないだけなのではないか、ということである<sup>13</sup>。確かに、「部屋を片づける」ことや「復習する」ことは、「友達が来る」「試験」まえに行われることから、そこだけを見れば、いずれもその前段階としての行為であり、「準備」である。しかし、その背後には、なぜ「友達が来るまえに部屋を片づける」「試験のまえに復習する」必要があるのか、という理由が存在するはずである。これまでは、なぜそのような準備が必要なのかという理由が全く考慮されることなく、ただ「～ておきます」に「準備」というラベルを貼るだけの指導が行われてきたように思われる。しかし、(9) (10) において「～ておきます」が使用されるのは、ただ「準備」を表すためではなく、その背後に「散らかっている部屋を見られないように」「合格できるように」「母に叱られないように」という場面・文脈が存在し、そのための措置を取ることを「～ておきます」を用いて表すためなのではないだろうか。

このことから、本稿では、「準備」は「～ておきます」の表面の一部を捉えたものにすぎないと考え、「～ておきます」の基本的用法を「措置」と捉えるのである。

このように、「～ておきます」を「措置」と捉えれば、そもそも「準備」「措置」に分類しなくてすむ。学習者への指導の際にも、「措置」として提示すればよく、これにより、「準備」か「措置」かがわからない、という問題も生じないのではないか。

---

<sup>13</sup> 練習 B3 の他の例も、その一文だけを見れば「準備」のように見えるが、場面が与えられれば、「レポートを書くときに」「うまく書けないという問題が起きないように」するための措置として「資料を集めておく」、「授業のときに」「理解できないという問題が起きないように」するための措置として「予習しておく」、のように「措置」と捉えられる。

### 4.3 「措置」と「放置」の違い

(18) あの箱、捨てましょうか。

……あとで使いますから、置いておいてください。

((6) 再掲)

(18) は「放置」であるが、これも、「措置」として捉えることができる。この場合、「問題」は波線部「あの箱、捨てましょうか」とあるように、箱を捨てられることである。つまり、あとで使うときに、箱がなくて使えないという問題が起きないように、そのまま「置いておく」ことを指示していることになる。

これまで、(18) のようなものは「放置」とされてきたが、「そのままにする」「その状態を維持する」という意味に焦点があてられるばかりで、なぜそのようにする必要があるのか、ということまではそれほど考慮されてこなかったように思われる。その結果、「準備」「措置」とは別の用法として立てられてきた。しかし、問題が起きないようにするための措置として「～ておきます」が使われていると考えれば、「放置」も、「措置」の一つとして捉えることができる。

ただし、「放置」は、何もせずにその状態を維持することが問題が起きないようにするための措置となる点で、当該行為を実行することで問題が起きないようにする措置とは異なる。両者は当該行為をするかしないかで分けられるのである<sup>14</sup>。したがって、指導の際に

<sup>14</sup> 以下は「措置」の例である。

(vii) (A が箱を持っている場面)

A : この箱、捨てましょうか。

B : あとで使いますから、置いておいてください。

(18) と (vii) との違いは、前者が、置いてある箱には触れずそのままの状態にする、つまり「置く」という行為は実行されないのに対して、後者は持っている箱をその場に置く、つまり「置く」という行為が実行される点である。同じ形式であっても、用法が異なるため、ただ「放置」「措置」というラベルを貼って、別々の用法として指導するだけでは、場面や文脈、そして両者がどのような点で異なるのか理解できず、結果、学習者が使えるようにはならないのではない。

は、「問題が起きないように備える」という場面・文脈で、当該行為を実行する場合を「措置」として、何もせずその状態を維持する場合を「放置」として、提示すればよいのではないか。

表 1 「～ておきます」の用法

	問題が起きないように備える」という場面・文脈
当該行為	実行する→措置
	実行しない→放置

これまでは、「準備」を第一の用法として、「措置」「放置」の三つの用法が、別々のものとして指導されてきた。しかし、上に述べたように、「～ておきます」の本質的用法を「措置」とし、「問題が起きないように備える」という場面・文脈で使用され、当該行為を実行する場合を「措置」、何もせずその状態を維持する場合を「放置」と分けることで、「～ておきます」の用法を、つながりを持った二つの用法として指導することが可能になると考えられる。

#### 4.4 母語話者による有標形選択の要因への説明

「～ておきます」が「措置」を本質的用法とするという説明は、佐藤（2015）の「母語話者による有標形選択の要因」にも説明を与えることができる。

まず、佐藤（2015）が「①段取り意識と行為遂行のタイミング」としたものである。

(19) a. 今日がテストなので、昨日は{勉強した / 勉強しておいた}。

〈0%〉

b. 今日から忙しいので、昨日のうちに試験の{勉強をした / 勉強しておいた}。〈76.2%〉

((12) 再掲)

(19b) において「問題」となっているのは、「今日から忙しい」という部分である。つまり、今日から忙しくて試験勉強ができないとい

う問題が起きないようにするための措置として、昨日のうちに「勉強しておいた」となる。(19b)には、「今日から忙しい」という理由が存在するため、有標形選択率が高くなっているのである。一方、(19a)には「問題」となる文脈がなく、それに備える必要もないため、有標形が選択されていない。

次に、「②結果の予想・確認による行為遂行の振り返り」である。

(20) a.私はここに自転車を {とめた / とめておいた}。〈28.6%〉

b.ここに自転車を {とめる / とめておく} と盗まれますよ。  
〈66.7%〉

c. お菓子をテーブルの上に {置いた / 置いておいた} ら、弟が食べてしまった。〈95.2%〉

((13) 再掲)

(20a) と (20b) は「盗まれますよ」の有無によって、有標形選択率が異なっているが、(20a) より (20b) の方が有標形選択率が高くなっているのは、まさにこの「盗まれますよ」が文脈にあることによる。普通、自転車を盗まれるような場所に置くことはない。それにもかかわらず、そのような場所に置くということは、何らかの問題があり、その問題が起きないようにするための措置として「ここに自転車を止めておく」と解釈されるためである。例えば、次のような文脈が想定される。

(21) (A と B はスーパーに買い物に来たが、駐輪場がいっぱいで、止める場所がない。そこで、A は仕方なく駐輪場の外に止めようとした。それに対して B が)  
ここに自転車をとめておく と盗まれますよ。

ここでの「問題」は自転車を止める場所がない（結果、買い物できない）ことである。つまり、A は、止める場所がなくて買い物できないという問題が起きないように、「ここ」（駐輪場の外）に止め

ようとした、ということになる。その A の取ろうとした措置に対して、B がそれでは盗まれるのでよくない、と言っているのである。

一方、(20a) は「盗まれますよ」という一言もなく、「問題が起きないように備える」という場面が想定されにくいため、有標形選択率が (20b) ほど高くない。

最後に、「③丁寧さ等の含意」である。

(22) (書店のカウンターで)

客：この本を注文したいのですが。

店員：このカードにお名前と電話番号を記入してください。

あとはこちらで {やります / やっておきます}。

((14) 再掲)

(22) における「あとはこちらでやる」というのは、「店員の側で注文の手続きを最後まで済ませる」ということであるが、ここでの「問題」は手続きが最後まで完了していない（結果、注文ができていないといった）ことであろう。つまり、手続きが最後まで完了していないという問題が起きないように、「あとはこちらでやっておく」ということになる。

その作業にあたってその後の結果についても慎重に考慮していることを含意するのは、「～ておきます」の基本的用法が「措置」だからであると考えられる。店員が「注文の手続きを最後まで済ませておく」と「～ておきます」を使うことで、店員が手続きが最後まで完了していないという問題が起きないようにするための措置を取ることが聞き手に想定される。それが「慎重に考慮している」印象を与え、丁寧さにつながっているのであろう<sup>15</sup>。

---

<sup>15</sup> 「考えておきます」の場合も、「考えます」とするよりも、慎重に考慮するという印象を与える。これも、「～ておきます」の基本的用法が「措置」であるためであると考えられる。話し手が「考えておきます」と言うことで、聞き手には、話し手が聞き手からの提案や要求について「(聞き手にとって) 問題が起きないように」「考える」という慎重な姿勢が感じられるのであろう。

## 5. 場面・文脈を工夫する必要性

「～ておきます」の本質的用法が「準備」ではなく、「措置」である、ということを述べたが、それを学習者に理解させるには、場面・文脈を考える必要がある。

次の例は、『文化初級日本語』改訂版の第 26 課における「～ておきます」の例である。

(23) A：どこへ行くんですか。

B：旅行会社です。夏休みに行くので…。

A：早いですね。

B：ええ。8 月は旅行する人が多いから、今から予約してお  
くんです。

(24) 武：食事はどうしようか。

良子：映画は 6 時半から 8 時半までだから、先に軽く食べて  
おかない？

武：それがいいね。

(25) (団体旅行のバスの中で)

添乗員：みなさん、ここで 15 分休憩します。ここを出発した後、下田に着くまで休憩はありませんので、ここでお手洗  
いに行っておいてください。

(26) (昼休み 会社で)

長井：午後の会議の場所はどこですか。

課長：3 階の大会議室です。

長井：では、エアコンをつけておきましょうか。

課長：お願いします。

これらを、「準備」や「措置」に分類して指導していたのでは、「～ておきます」の有無による違いがわかりにくい、或いは、なぜ「～ておきます」が使用されるのかがわからないといった問題が生じる。しかし、「～ておきます」の本質的用法を「措置」であると捉えればそのような問題もなくなる。

(23) (24) (25) は、波線部に「8月は旅行する人が多いから(予約できない)」「映画は6時半から8時半までだから(食事できない)」「下田に着くまで休憩はありませんので(お手洗いにいけない)」という「問題」が、それぞれ文脈に現れている。そのため、その措置として、「今から予約しておく」「先に軽く食べておく」「お手洗いに行っておく」のように、「～ておきます」が使用されることがわかる。これらは、「～ておきます」が使用される場面、文脈がわかりやすく示された例と言える。

一方、(26) では「問題」の部分が文脈に現れておらず、「～ておきます」の有無による違いがわかりにくい。したがって、(26) のような例は、次の波線部のように、「問題」の部分がわかるような文脈を考えて付け足す必要がある。

(26') (昼休み 会社で)

長井：午後の会議の場所はどこですか。

課長：3階の大会議室です。

長井：あそこは大きいですから、冷えるまでに時間がかかりますね。今からエアコンをつけておきましょうか。

課長：お願いします。

このように、指導の際には、教材に適切な場面・文脈がなければ考えたり、欠けているものがあれば付け足したりして、「問題が起きないように備える」という場面・文脈で、問題が起きないようにするための措置として「～ておきます」が使用されるということが学習者に理解できるような例を提示していく必要がある。



## 6. 中国語との対応

### 6.1 現行の記述と教え方

次の(27)(28)(29)は、(4)(5)(6)の『文法解説』<sup>16</sup>における翻訳であるが、「～ておきます」に相当する形式が現れていない。中国語には「～ておきます」に相当する形式がないようである。

(27) 下個月出差，先把飯店訂好吧？

(28) 剪刀用完之後，請放回原處。

(29) 之後要使用，請先放著。

菊地・増田(2005)は、「指導が困難」「習得困難(使えるようにならない、誤りが多い)」をまとめて「学習困難」と呼び、その理由の一つに「学習者にとって、その母語の意味世界と比べて抵抗・負担を伴う」場合を挙げているが<sup>17</sup>、「～ておきます」は、そのうちの「その項目の存在意義が見えにくい(それにあたるのが母語でない)」(菊地・増田 2005: 292)にあたり、適切な指導が行われなければ、学習者にとっては「学習困難」な項目であることがわかる。

また、学習者が文型理解の参考にするであろう『文法解説』を見ても、その説明は 3.1 であげた先行研究の記述と何ら変わることはない。

(30) a.表示在某一時間之前結束必要的動作、行為。

b.表示以備下次使用而完成必要的動作或採取臨時的措施。

c.表示將成為結果的狀態一直保持下去。

そして、現行の教科書の記述や教え方をもとにした指導は、学習者の「～ておきます」への理解がそのまま反映されている。

<sup>16</sup> 『大家的日本語 進階I 文法解説・参考詞彙・課文中譯』改訂版

<sup>17</sup> 理由については、a) 以外に、b) その項目の存在意義はわかるが、母語と 1 対 1 に対応しない [例：たら (→なぜ if と when が一緒なのか)、受身 (→なぜ何種類もあるのか)]、c) 母語と 1 対 1 に対応するよう見えるが、実は使い方に違いがある [例：たい] もあげられている。

## 6.2 学習者の「～ておきます」に対する理解

A 大学の日本語学科夜間部三年生の文法のクラスを受講する学生 34 名を対象に、「～ておきます」をどのように理解しているのかについてのアンケート調査を行った。「～ておきます」を使った会話文の作成と、「～ておきます」の意味を記述式で書かせるものである。

まず、「～ておきます」の意味であるが、準備、あるいはそれに類するものを書いていたのは、34 名中 30 名だった<sup>18</sup>。「予め何かをする」「事前準備」「事先準備(好)」「預先做好準備」「事先做好某動作」といったことが書かれており、これらが「～ておきます」の意味と考えているようである。

次に、会話文の作成では、準備、あるいはそれに類するものを書いた 30 名のうち、25 名が (31) のような会話例を作っていた。

(31) A: あした友達が来るのでおいしい料理を準備します。

B: そうですね。早く準備しておいたほうがいいですよ。

一方、(32) の波線部にあるような、文脈に「問題」が現れた例を作成したのは 5 名であった<sup>19</sup>。

(32) A: 来週の水曜日に日本に行くんでしょう？荷物は準備しましたか？

B: いいえ、まだです。月曜日に準備するつもりです。

A: でも、荷物を早く準備しておいた方がいいですよ。

間に合わないなら大変でしょう？

A: そうですね。わかりました。

<sup>18</sup> 意味が二つ書かれている場合は、一つ目の意味を「～ておきます」の意味としてカウントした。残りの 4 人中、3 人は「放置」、1 人は無記入であった。尚、意味を二つ書いた学習者は 7 人おり、そのいずれもが「準備」を第一に、「放置」を第二の意味として書いていた。

<sup>19</sup> (32) において、この例の作成者が「～ておきます」をたんに「準備」であると捉えていないことは、「荷物を準備しましたか。」「月曜日に準備するつもりです。」において「～ておきます」を使用していないことからわかる。

アンケートの結果から、このクラスの学習者の大部分が、「～ておきます」を「準備」として捉えていることがわかる。これは、現行の教科書の記述や教え方が、忠実に学習者の意識に反映されていることを示している。しかし、「～ておきます」を「準備」と捉え(31)のような「準備」の場面で使用されると理解しているだけでは、「～ておきます」の有無による違いがわからない、「準備」「措置」の違いがわからない、といった問題は解決されないままである。

また、いくら中国語を用いて説明したとしても、現行の教科書の記述や教え方をもとにした指導では、学習者が「～ておきます」を使えるようにはならない。

このことは、冒頭の誤用・非用にも反映されている。(1)は「～ておきます」を「準備」と捉えているため、「準備する」が常に「～ておきます」とともに用いられると思ってしまうことによる誤用だと考えられる<sup>20</sup>。(2)もまた、「～ておきます」を「準備」と捉えていることによる誤用だと考えられる。しかし、運動会の目的について考えることが、何か問題が起きないようにするための措置であるとは考えにくい<sup>21</sup>。(3)は事故や災難が起こったときに、食べ物なくなるという「問題」が起り得る。そのための措置として「食べ物を準備する」という文脈であるにもかかわらず、「～ておきます」が使用されていない例である。いずれも、「～ておきます」が「措置」であり、「問題が起きないように備える」という場面で使用されると

---

<sup>20</sup> ここでは、「履歴書を準備して、応募する」ことがアルバイトに応募するための一連の動作として考えられるため、「準備して、応募しておきます」とする必要がある。ただし、これだけでは「～ておきます」の有無による違いがわかりにくいため、「忘れないように」「締め切りに間に合うように」などの文脈を補い、問題がないようにするための措置として「～ておきます」が使用されると指導することが望ましい。

<sup>21</sup> 運動会のプログラムについて話し合っている場面で、雨天の場合、プログラムをどうするかという質問に対して、「それについては考えておきました。」とするのであれば、雨天の場合でも問題が起きないようにするための措置として「～ておきます」が使える。

ということが指導されていれば、抑えることができたかもしれない例である。

## 7. 終わりに

「～ておきます」における教材の記述や教え方が、学習者が使い方を正しく理解し、適切に産出するための記述になっていないことから、その問題点を指摘し、「～ておきます」の基本用法は「措置」であり、「問題がないように備える」という場面、文脈で使用されるとして指導することを提案した。この指導法がはたして有効であるかどうかは、実際の授業を通して、検証していく必要がある。この論文の課題としたい。

## 参考資料

スリーエーネットワーク (2013)『みんなの日本語初級Ⅱ』[第2版]  
スリーエーネットワーク  
文化外国語専門学校 (2013)『文化初級日本語Ⅱ』[改訂版] 凡人社

## 参考文献

庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク  
市川保子 (2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』東京：スリーエーネットワーク  
市川保子 (2010)『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』東京：スリーエーネットワーク  
笠松郁子 (1993)「「しておく」を述語にする文」言語学研究会編『ことばの科学』6, pp.292-294, 東京：むぎ書房  
菊地康人 (2009)「「ておく」の分析」『東京大学留学生センター教育研究論集』15, pp.1-20, 東京大学留学生センター

- 菊地康人・増田真理子 (2005) 「「学習困難項目」とどう向き合うか」  
『2005 年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp.292-294
- 佐藤琢三 (2015) 「第 1 章 補助動詞テオクー意味・語用論的特徴と  
学習者の問題」, 阿部次郎、庵功雄、佐藤琢三 (編) 『文法・談  
話研究と日本語教育の接点』 pp.1-18, 東京：くろしお出版
- 白川博之 (2002) 「記述的研究と日本語教育－語学的研究の必要性和  
可能性－」 『日本語文法』 2 巻 2 号, pp.62-80, 東京：日本語文  
法学会
- 高橋太郎 (1976) 「すがたともくろみ」 金田一春彦編 『日本語動詞の  
アスペクト』 pp.117-153、東京：むぎ書房
- 谷口秀治 (2000) 「「～ておく」に関する一考察－終結性を持つ用法  
を中心に－」 『日本語教育』 第 104 号, pp.1-9
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法の設  
計図」 野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育  
文法』, pp.1-20, 東京：くろしお出版
- 山本裕子 (2005) 「「～ておく」の意味機能について」 『名古屋女子大  
学紀要』 51, pp.207-218
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクト研究」 金田一春彦 (編)  
『日本語動詞のアスペクト』 pp.115-327、東京：むぎ書房
- 吉田妙子 (2012) 『日本語動詞テ形のアスペクト』 京都：晃洋書房
- 林玉恵 (2011) 「台湾で使用されている日本語初級教科書の種類とそ  
の特徴」 『山形大学大学院社会文化システム研究課紀要』 第 8 号,  
pp.117-132